黒い箱
阿刀田　高
新潮社
（3／15刊・¥1100）

阿刀田高の長篇である。境界線上の作品だろう。

「黒い箱」とは、文字通りのブラック・ボックスを意味する。しかし、これは人生のブラック・ボックスのことなのである。

脱サラ翻訳家の主人公は、ある日仕事場のマンションで、見知らぬ女と出会う。女は何の事情も説明しないまま、毎朝現れ、夕方には帰っていく。そして、押し入れの中に黒い箱があった。それ以来、日常と思っていた自分の生活（例えば、妻の行動）に、得体の知れない謎が潜んでいることに気付く。結局、この黒い箱の意味は、解明されないまま、物語は終わる。

日常の出来事に、すべて意味付けをすることなど、そもそも出来はしない。日々の時間はそれほど余裕のあるものではないし、第一、意味を考えたところで、大きな得をするわけでもない。本書も、そういった、どこにでもある「黒い箱」……陥穽を描いた作品だ。ありえるが、出会う可能性はない——日常ミステリの世界がそうなら、ありえないが、出会うかも知れない——が本書のような作品の在り方だろう。

（俊）